

海外の支援団体との関係からみる 現在の両校の違い

私の専門は宗教を通じたアメリカ史研究です。本日はその手法を使い、アメリカン・ボードと神戸女学院、同志社大学両校との関係を、19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカの宗教史あるいは社会史の中に置き、そこから何が見えてくるかをお話したいと思います。

まず現在の両校の違いを、海外の支援団体との関係において見てみます。神戸女学院の支援団体であるKCC (Kobe College Corporation) は91年の歴史をもち、米国シカゴに本部があります。神戸女学院はアメリカン・ボードが設立した学校ですが、ある時からKCCが支えるようになり、現在に至っています。神戸女学院がKCCの存在をどう考えているかは、同校の寄付行為細則の前置きを読むと分かります。「我々は、学校法人神戸女学院が、その創立以来永年にわたって、KCC及び公益社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会と、相互の深い信頼と協力による親密な関係を維持し、運営されてきたことを神に感謝する。…」めぐみ会とは同窓会です。

レクチャー

同志社と神戸女学院

—アメリカン・ボードとの関係をめぐって

神戸女学院 理事長・院長

森 孝一



神戸女学院に対するKCCの影響力にはかなり大きいものがあります。例えば理事会のメンバーは15名で構成されますが、うち3名はKCC推薦の理事です。神戸女学院の寄付行為には、他の学校にはない珍しい規定があります。重要な項目は理事会で決定する前に、めぐみ会とKCCの意見を聞かなければならないというものです。例えば院長は学内教職員選挙で選ばれますが、これを理事会で決定する前にめぐみ会とKCCに意見を聞かないといけない。新学部設置などにあたって、めぐみ会とKCCの意見を聞く必要があります。これに対して同志社の場合、そのようなことはまったくありません。

アメリカン・ボード設立の背景① —第二次大覚醒のエネルギ—

両校を設立したアメリカン・ボードはアメリカの会衆派教会の海外宣教団体です。アメリカの海外宣教団体としては最初の団体でした。会衆派はピューリタンがイギリスからアメリカに伝えた教派です。アメリカン・ボードの設立は1810年。まず1806年にマサチューセッツのウイリアムズ・カレッジ、これは現

在も有名なりベラルアーツ・カレッジですが、この学生6名が通り雨をしのぐために入った干し草小屋の中で、海外伝道の志の誓いを立てたのが発端でした。いわゆる「干し草祈祷会」です。2年後彼らはアンドーヴァー神学校へ進み、1810年、会衆派教会のマサチューセッツ年次大会で海外伝道参入の請願書を提出します。これが採用されてアメリカン・ボードが設立されました。

背景には2つの事情がありました。一つは19世紀初頭の第二次大覚醒、信仰復興運動。もう一つは会衆派教会内における、キリスト教理解をめぐめる対立です。まず第二次大覚醒について。大覚醒によく似た言葉にリバイバルがあります。どちらも信仰の覚醒ですが、リバイバルは局地的であるのに対して、大覚醒は当時の全アメリカを巻き込んだ形で起こるリバイバルです。ウィリアム・マクラフリンというアメリカ・キリスト教史研究者は、現在までアメリカでは4回大覚醒が起こったと言っています。最初は1730年からの30年間、全ニューイングランド植民地で起きました。第二次が1800年からの30年間、全フロンティアを巻き込んだもの。第三次は1890年から

30年間、シカゴやデトロイトなどの大都市を中心に社会的福音運動を伴ったもの。そして第四次が1960年から1990年とされていますが、私はこれが現在も続いていると考えています。

さて、この第二次大覚醒が起きたフロンティアですが、まさに開拓しながら定住していく中での宣教です。そこには教会などありませんから、最初は野外にテントを張るなどして集会が行われました。このフロンティアでのリバイバルを通じて非常に勢力を拡大した教派がバプテスト教会とメソジスト教会でした。共にニューイングランドでは弱小教派でしたが、地を這うような伝道を行い、その後アメリカの二大教派になって現在に至ります。なお、このリバイバル形式の集会はそのまま現在のアメリカの礼拝形式となっています。非常に感情的でセンチメンタルな讃美歌を何十分と歌い上げた後で、罪の悔い改めを迫る厳しい説教が行われるものです。

これに対して会衆派教会はフロンティアに出ていきませんでした。彼らはニューイングランドにしっかりとした基盤をもっていたので、わざわざ苦勞してフロンティアに出ていく必要がなかったので

す。また彼らにはエリート意識があり、感情的な礼拝にはなじまなかったのだと思います。しかし先ほどの干し草祈祷会に見られるように、マサチューセッツでも内陸部のフロンティア地域では、会衆派教会においても信仰的な高まりはありました。他の教派がそのエネルギーをフロンティアに向けたのに対し、会衆派教会は、高まったエネルギーを海外へ向けただけです。

アメリカン・ボード設立の背景② ユニテリアン批判から生まれた 原点回歸意識

二つ目の背景としてのキリスト教理解をめぐめる対立について。一般的な神概念である三位一体論を認めず、神は第一格の神しかいない、創造主としての神しかないとするのがユニテリアンです。この信仰は宗教改革の時代からあったようですが、ニューイングランドでは1700年あたりから、特にボストンのインテリ層を中心に広まりました。今でもボストンの由緒ある教会の多くはユニテリアンです。もとは会衆派教会であったものがユニテリアンの教会に乗っ取られていったわけですね。

ユニテリアンの登場は近代思想の影響が強かったと私は考えています。特にニュートンの影響が非常に強かった。ニュートンが万有引力の法則を発見したのが1687年。この発見が人類の思想史上どのような意味をもっていたかというところ、宇宙の運動原理の問題ですね。ニュートン以前は、宇宙を動かしていたのは神でした。ところがニュートンは、宇宙は宇宙自体の内に運動原理をもっていると言った。しかし彼は神を否定したわけではなく、万有引力の法則が神であると考えた。その影響を大きく受けたのがユニテリアンです。

会衆派教会内でこのユニテリアン批判が起こり、本来のピューリタンの使命感へ戻れという意識が生まれました。その使命とは、ピューリタンの正しい信仰に基づいた社会形成です。ユニテリアンのような思弁的神学ではなく、社会形成へと重点が移されていった。キリスト教国家としてのアメリカの使命感が、ユニテリアン批判という形で高まっていく。これが会衆派の場合は海外伝道、他の教派の場合は国内伝道へと向かったのではないかと思います。

福音の伝達から文明の伝達へ ―米西戦争が一大転換点―

1823年、第5代アメリカ大統領ジェームス・モンローが、いわゆるモンロー主義政策を発表しました。外交の範囲を西半球つまり南北アメリカ大陸に限った、ある種の鎖国政策です。鎖国する代わりに国力増強を行った。この内向きの時代に、会衆派は海外伝道を始めました。アメリカがこのモンロー主義政策を放棄して積極的な世界戦略に踏み出していく契機となったのが、1898年の米西戦争、アメリカとスペインとの戦争です。最初はスペイン領キューバの独立を助ける形でアメリカが出兵し、のちに同じくスペイン領だったフィリピンへ軍艦を送った。この戦争はアメリカの政治経済、外交における一大転換点になっただけでなく、海外伝道においても大きな転換点になりました。福音の伝達から文明の伝達へという、宣教戦略の重大な転換点になったわけです。

会衆派は、インド、ハワイ、パレスチナ、西アフリカ、東南アジア、中国、ミクロネシアでの伝道の後の1869年、最後に日本伝道を行いました。来日が遅

かった理由の一つには、やはりキリシタン禁制があったと思います。長老派教会の日本伝道は会衆派より10年早い1859年。横浜に入って活動していたために、会衆派は関西で伝道を行っています。

神戸女学院の歩み

―伝道者育成から高等女子教育へ―

神戸女学院はアメリカン・ボードの2人の婦人宣教師によって創立されました。イライザ・タルカットとジュリア・ダッドレー。設立地は現在の神戸市、北野の異人館のあるあたりです。区分で言うと、外国人しか住めない居留地ではなく日本人も住める雑居地でした。しかし土地の所有は日本人にしか認められていなかったように、そこで校地購入の名義人になったのが新島襄です。

創立当初の意図は、日本における女性伝道者育成のために女子セミナリーをつくることでした。のちに旧三田藩藩主の九鬼隆義が旧藩の子女教育のために800円を献金しました。第2代院長クラークソンはアメリカのマウントホリヨークというリベラルアーツ・カレッジの出身でしたので、伝道者育成よりも女性教育に重点を移していきます。そして第3代

院長ブラウン、第4代院長ソールの時代に、高等女子教育を行うカレッジ化をめざした整備が進みます。

ブラウン、ソールの時代に書かれた基本理念をいくつかご紹介しましょう。まず1889年のブラウンの言葉にこうあります。経営を日本人に委ねると楽かもしれないが、それでは自分たちが享受している「高度なキリスト教教育の最高の理想を実現するためのより大いなる自由」を失うと。1893年、ソールは「高度の訓育の大切さを守るためには、神戸女学院はミッションの管理下に留まるべきだ」と述べた。すなわち最先端のアメリカ文明を伝えるという、19世紀末のアメリカの使命感がはつきりと表れている言葉ではないでしょうか。そして神戸女学院はこの理念を疑うことなく従順に受け入れ、アメリカ文明を身につけた、近代的な女性を養成してきたのです。

アメリカン・ボードに 支えられ続けた神戸女学院と アメリカン・ボードから 独立した同志社

1899年、政府は文部省訓令第12号を出して、宗教系学校に対する締め付け

を行っていきます。宗教系学校で宗教を教えてはいけない。反した場合は特権を剥奪すると。特に男子校にとっては非常に大きなプレッシャーとなりました。特権の一つには兵役猶予がありましたので、これを剥奪されると学生を集めるのが非常に難しくなる。そこで泣く泣く従った多くの学校があります。

神戸女学院はこの締め付けをはつきりと拒否しています。なぜか。学校運営を握っていたのがアメリカン・ボードであったことが理由の一つ。もう一つは自分たちの教育に対する自信です。すなわち特権を与えられなくても、他の男子校に負けないような高度なカレッジ教育ができるのだと。1890年、アメリカン・ボードは既に、中部婦人伝道会(Women's Board of Missions of the Interior、WBM I)が資金協力をして神戸女学院をカレッジ化していくことを決めています。その結果、1909年、専門学校令による専門部、つまり現在の大学として認可されたのです。

WBM Iは南北戦争終結直後の1868年に設立された3つの婦人伝道会の一つで、アメリカン・ボードに所属していました。神戸女学院へ実質的に中心とな

って資金援助を行ったのがWBM Iで、同志社女学校へのサポートは太平洋婦人伝道会が中心となって行われました。

1918年、キリスト教の6教派協同で東京女子大学が設立されます。この時、神戸女学院専門部も合流しないかという誘いを受けましたが、アメリカン・ボードの日本支部とWBM Iはこれを拒否し、独自でカレッジ化の推進を決断しました。本格的な女子大学をめざし、キャンパス移転も含めて1920年、神戸女学院を支援するためにWBM Iの理事が中心となって設立されたのが、最初に述べたKCC。そして1933年、第5代院長デフオレストによって神戸女学院は岡田山キヤンパスへ移転します。土地代金はめぐみ会が集めてくださり、ヴォーリス建築のための費用70万ドルはKCCの献金によって賄われました。

一方、同志社の歩みはどうだったのでしょうか。今出川校地の土地も建物もアメリカン・ボードの出資によるものでしたが、政府が同志社を「アメリカの学校」と見なすことを避けるため、アメリカン・ボードは新島に直接、毎年80000ドルを送金していました。しかし1887年、財政上の支配が理事会に移りました。そ

して1890年、新島が召天します。この時、同志社にとっては、ある種の重しはなくなつたのではないでしようか。新島と共に同志社を担つていた熊本バンドと宣教師たちとの対立はそれまでもあつたと思いますが、まだ新島がいたから直接的な対立は避けられていた。その新島が天に召されることによつて対立が顕在化していく。同志社で熊本バンドのリーダーとなり、のちに第2代校長となつた小崎弘道は、アメリカン・ボードからの独立をめざしました。それに対抗する形でアメリカン・ボードからの資金援助が止まり、やがて全宣教師が同志社から引き上げた。その結果、同志社病院、京都看病婦学校が廃校に追い込まれていきました。

宣教師たちの根底にあつた 社会進化思想

確かラーネットの言葉だつたと思いますが、同志社には3つの源流があると思われています。新島、アメリカン・ボード、熊本バンドです。この熊本バンドと宣教師たちとの対立は、いったい何を原因として起きたのか。一般には熊本バンドの愛国主義や国粋主義が原因と言われている

ますが、私はそれだけではなく、もっと大きな、19世紀末のアメリカにおける政治的・経済的・宗教的状况を反映した対立だつたのではないかと考えています。対立点としては2点挙げられます。一つは双方の文明理解の対立、もう一つは新神学をめぐる対立です。

まず、文明理解の対立について。宣教師たちの文明理解の根底にあつたのは社会進化思想でした。これは当時の先端を行く哲学で、元になつてゐるのはダーウィンの進化論です。海外伝道を文明の伝達という形で行う意図はアメリカン・ボード設立当初からありました。しかも不思議なことに、同じ国内にいるネイティブ・アメリカンへの伝道も海外伝道でした。当時のアメリカが彼らをどう見ていたかが分かりますね。伝道を行いつつ、ネイティブ・アメリカンを文明化する意図があつたのだと思います。

それがもつとはつきりと、社会進化思想に基づいた文明の伝播という形で現れてきたのが、19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期でした。その代表が先ほどの米西戦争。キューバでの戦いはまだ舞台が西半球でしたが、フィリピンへの出兵は、鎖国をやめて積極外交に出

るという大転換です。当時のマッキンリー大統領がフィリピン出兵を決断した夜のことを、のちに雑誌に語っています。「フィリピン人を教育し、高め、文明化し、キリスト教化するために、アメリカがフィリピンを統治する」と。モンロー主義をやめてアメリカがフィリピンに進出する、そのための戦争の大義。根本にあるのは社会進化思想です。植民地にはないが、彼らが自分で自分の国を治めるまで統治する。これは今もアメリカの海外戦略ですね。自由と民主主義のためにイラクに攻め込み、中東が自分たちの足で立つようになれば撤退する。その原型がここにあります。

実はマッキンリーの考えは独特のものではなく、当時のアメリカの右から左まですべてがそうであつたというのが、私の研究の結果です。会衆派教会の牧師ジョサイア・ストロングは1885年、ベストセラーとなつた著書『我が祖国』で語っています。「20世紀に向けて、アングロ・サクソンの新しい中心としてのアメリカに与えられてゐる使命は、アングロ・サクソン文明を世界に伝えることであつた」。アングロ・サクソン文明とは、市民的自由を中心の価値とする政治体制

としての共和制と、アメリカ的キリスト教です。共和制は民主主義と言い換えてもいいでしょう。海外伝道と帝国主義的膨張政策は別々の事柄ではなく、アングロ・サクソン文明を伝えるという一つの事柄の裏と表だったのです。

アメリカン・ボードの中で、クリスチャンを獲得するという直接伝道から教育重視へと路線が変更されたのは、アメリカン・ボードに限定された問題ではなく、



もっと大きな潮流を反映していました。アメリカは農業国家から工業国家に変貌し、1890年には余剰生産物が出てきた。これをさばくためにどうしても海外マーケットが必要だった。同じ時期にヨーロッパ列強や日本も同じような状況になり、帝国主義列強の争いの時代になります。ですから当時のアメリカでは、帝国になることへの反対の声はまったくありません。米西戦争後の1900年には義和団の乱にも出兵する。日本もヨーロッパ列強も出兵しました。海外市場で一番有力なのは今と同じで中国だからです。中国をどこが獲るか。そのような海外戦略とアメリカン・ボードの文明戦略はまったく同じです。その根底にあるのが社会進化思想的な文明理解だったのです。

熊本洋学校の校長を変えた学生たち

宣教師たちの中に無意識的に存在したアングロ・サクソン文明優位主義が、熊本バンドと対立したのではないか。そして熊本バンドの文明理解に大きな影響を与えたのが、熊本洋学校校長のL・L・ジェーンズだったのではないかと思えます。フレッド・G・ノートヘルファアの『アメリカのサムライ』L・L・ジェー

ンズ大尉と日本」を読むと、ジェーンズの文明理解は当時のアメリカ全体の潮流から見ると非常に例外的で、なぜこのような文明理解が可能となったのが理解できないほどです。

例えばジェーンズが1888年、同志社の横井時雄に宛てた手紙にはこうあります。「彼らが個人的に異教徒すなわち非キリスト級の民をどう見ているかは、今あまり問題ではない。しかしこの理論をしつこく邪悪にたたきこむことによって、またインド・中国・日本の国民をそのようなものとして誤って描きだし、ヒンズー教・仏教・回教などの―あなたがたの神道や半ば宗教としての儒教もだが―宗教としての発展について誤った描きだした方をすることによって、欧米は人類の四分の三の人びとにたいして、政治的・軍事的・外交的・社会的・宗教的關係を支配しようとしてきたのだ。」ここでの「彼ら」とは宣教師であり、「この理論」とは社会進化思想です。そしてジェーンズはアメリカがいかにひどい侵略をしてきたかを挙げ、「白人キリスト教徒のうわべだけの愛情と良心は、欧米の力と貪欲による不幸な犠牲者にたいしては麻痺している。そうでないのなら、

どうしてこのような永続的残虐が許されてきたのであろう」と書いています。

これは当時のレベルをはるかに越えた文明理解です。なぜジェーンズがこのような文明理解をもてたのかは、もっと研究されるべきでしょう。ここからは私の推測ですが、ジェーンズを変えたのは、彼が教えた、のちの熊本バンドの学生たち自身の力だったのではないか。『熊本班追懷録』によれば、第1期生の卒業式でジェーンズは「彼らの英語の発音は、同年代のアメリカの青年と変わらない。彼らの学業の進歩は、米国陸軍士官学校と比較しても遜色ない」とも語っています。

ジェーンズは全科目の授業を英語で行いました。学生たちはそのスパルタ教育についていった。それはおそらく彼らに、幕末に鍛えられた教養があつたからでしょう。その現実を目の当たりにした時、ジェーンズはアングロ・サクソン以外の文明理解についての考えを変えざるを得なかったのではないか。アメリカが最先端であつてアジア諸国を引き上げていかねばならない、などという文明理解ではないのだろうかという疑問を持ったのではないのでしょうか。のちにアメリカに帰国

したジェーンズを訪ねた海老名弾正や小崎弘道に、彼はこう語っています。「アメリカの文化と文明は西洋文明同様、末期に入つており、世界の精神界の指導力は移動しており、今後は日本人が世界の精神的発展の中心的役割を果たすべきだ」と。いろいろと問題のある発言かとは思いますが、当時のアメリカは、衰退するヨーロッパ文明に代わつて、アメリカがアングロ・サクソン文明を伝える役割と力をもっていると考えていた。しかしジェーンズは「そのアメリカ文明自体も衰退している。今から世界の中心になるのはおまえたちだ」と、2人を励ましているんですね。

自由主義神学をめぐる対立

二つ目の新神学(Liberal Theology)、自由主義神学とも呼ばれ、19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパ・アメリカの神学的潮流の中心を担いました。これは近代思想なんですね。これをキリスト教が受け入れるかどうか。アメリカでは受け入れるグループと拒否するグループに、真つ二つに分かれた。これが「フアンダメンタリスト論争」です。特にバプテスト教会と長老派教会を真つ二つに

割つた。聖書は神の靈感によつて書かれたというのがフアンダメンタリスト、根本主義者。それに対して近代思想を取り入れてキリスト教を再解釈していくのがモダニスト。このモダニスト、近代主義者の神学が新神学、自由主義神学です。

神戸女学院の文献を見ると、当時の院長たちが新神学の影響を懸念していたことが分かります。4代院長ソールは「新神学は日本人が考えたものの。贖罪を等閑に附しており、福音的キリスト教に反対している。この学校は自分たちがキリスト教教育と考える路線を保ちたい」「新神学は日本人思想家たちの創始になり、特別に日本に合うように改められたもの」などと言っています。神戸女学院では、この言葉に反論できる人はいなかった。そのまま受け入れていくしかありませんでした。

同志社の場合はどうか。まったく違いました。浮田和民は宣教師と対立して同志社を去り、東京専門学校、今の早稲田へ移りますが、『国民之友』で外国人教師を「偶像崇拜者」と呼んでいます。金森通倫は回顧録の中で「デビスの神学は保守的オルソドックス、我々の方はゼン

ス(ジェーンズ)やピーチャー(Lyman

Becher) 仕込みで、自由神学だったから、その衝突は免れない」と書いています。熊本バンドの学生たちは自由主義神学で理論武装をし、鍛えた英語で宣教師たちを負かしていきました。

小崎弘道は1893年、シカゴ万国宗教会議に招かれた際、日本の神学は自由主義神学が主流であると語っています。

アメリカにおけるファンダメンタリスト論争を彼はちゃんと理解していました。

そして同時に開かれた宣教師大会で、特に長老派教会内の対立を背景に彼はこう言うんですね。当時アメリカン・ボードはリベラル派の代表だったアンドーヴァー神学校出身者を宣教師にしない方針だったようですが、「どうして、もっと優秀な宣教師を送らないのか」と。

一方で、ジェーンズと熊本バンドの文明理解と自由主義神学理解には、アメリカでは見ることのできない、ある種の「ね

じれ現象」がありました。彼らは自由主義神学すなわち近代思想を受容します。近代思想の中心は聖書批評学と進化論です。その進化論の中にはダーウィンの進化論と共に、スペンサーの社会進化思想も含まれるわけです。ですからリベラル

派の人たちは社会進化思想を受け入れる。ところが熊本バンドとジェーンズの場合は、聖書批評学とダーウィンの生物進化論は受け入れるが、社会進化思想に基づいた文明理解は受け入れませんでした。

ジェーンズは熊本バンドの学生たちとの出会いに触発されて、自身の文明理解を形成しました。それは相対主義的、多元主義的、普遍主義的なものであったと思います。その影響を受けた熊本バンドの文明観が相対主義、多元主義、普遍主義であったかという点、どうもそこは危うい。ジェーンズが海老名と小崎に語った「これからは日本が中心になっていか

ねば」というような国粹主義に傾く傾向があったのかもしれない。そのような意味で、神戸女学院のソール院長が言ったように、「新神学は日本人が考えたもの」という捉え方も、あながち間違っていないかと言えるのかもしれない。

同じアメリカン・ボードによって同じ年に設立された神戸女学院と同志社は、アメリカン・ボードとの関係において対照的な歩みが続けてきました。その原因をあえて単純化して述べれば、同志社には熊本バンドが存在したが、神戸女学院にはそれにあたる存在がなかった。熊本バンドの背後にはL・L・ジェーンズの存在があり、同志社における宣教師たちと熊本バンドとの対立点は、社会進化論的な文明理解と新神学だった。この2つは19世紀末のアメリカにおける宗教、思想、文明理解、世界戦略をめぐるアメリカ全体の潮流という、マクロ的な時代状況を反映したものであったと言えるのではないでしようか。

(2011年6月25日、同志社社史資料センター企画展「まかれた種―神戸女学院と同志社」公開講演会。クラーク記念館クラーク・チャペル)

略歴 森孝一(もり こういち)氏
同志社大学大学院神学研究科修士課程修了。米国Graduate Theological Union 博士課程修了。Th.D.(神学博士)取得。1978年より同志社大学神学部助手、専任講師、助教授、教授に就任。その後、同志社大学神学部長・神学研究科長、学校法人同志社理事、評議員等を経て、2010年より学校法人神戸女学院理事長・院長、同志社大学名誉教授。専門はアメリカ宗教史。主な著書に「宗教からよむ『アメリカ』」講談社選書メチエ・1996、「アメリカのグローバル戦略とイスラーム世界」共編著(明石書店・2009)ほか。